

〈論文〉

中学校保健体育教師の体育授業の力量形成に関する研究

—教職歴の差異による悩みに着目して—

嘉 数 健 悟
岩 田 昌太郎
木 原 成一郎
徳 永 隆 治
林 俊 雄
大後戸 一樹
久 保 研 二
村 井 潤
加登本 仁

要 約

本研究では、中学校保健体育教師の体育授業について悩みの度合いを明らかにし、さらに教職歴による差異を明らかにした。その結果、以下の3点が明らかとなった。

①保健体育教師の体育授業についての悩みは、低い傾向にあった。一方で、ダンスや武道の学習指導に関する質問項目については、他と比較すると高い傾向にあった。②教職経験年数別では、若手、中堅、ベテラン関係なくダンスや武道の学習指導に関する悩みが高い傾向にあった。③若手教師は、授業の実践に関する悩みを抱えてながらも、生徒指導や部活動指導などそれ以外の役割を求められており、授業の充実や改善に向けて十分に組み立てていない傾向にある。

キーワード：保健体育教師，教職歴，力量形成，悩み

1 研究の背景と目的

近年、わが国では教師教育に関する様々な答申が出されており、養成段階だけでなく、現職段階における研修の重要性が求められている。

そもそも、わが国では1980年代以降、「従来の一般的概念であった教員養成（teacher training）という観点にかわって、養成・採用・研修の連続性を意識した教師教育（teacher education）という観点が強調されるようになってきた」（山崎，2002，p11）。例えば、「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」（教育職員養成審議会，1997）では、教員の資質能力が固定的なものでなく、変化し、成長していくものであり、生涯にわたってその向上が図られる必要があると指摘されている。また、「今後の教員養成・免許制度の在り方について」

(中央教育審議会答申, 2006) では, 教職課程の質的水準の向上や教職大学院の設置, 教員免許更新講習など, 教員養成や現職研修の充実・改善についての方策が提言されている。さらに, 「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(中央教育審議会答申, 2012) では, 教師が生涯にわたって実践的指導力等を高めながら, 探究力を持つという「学び続ける教師像」が打ち出されている。

このような一連の提言を踏まえると, 教師は養成段階も含めて生涯にわたって学び続け, その中で成長していくものであると考えられる。とりわけ, 現職段階については, 養成段階の4年間よりも長いことから, その力量^(E1) 形成の向上方策について検討していく必要がある。

そのような中, 「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(中央教育審議会答申, 2012) の中では, 「大学での養成と教育委員会による研修は分断されており, 教員が大学卒業後も学びを継続する体制が不十分である」や「自らの実践を理論に基づき振り返ることは資質能力の向上に有効であるが, 現職研修において大学と連携したこのような取組は十分でない」ことが指摘されている。そのため, 同答申では「教育委員会と大学との連携・協働による現職研修のプログラム化・単位化や, 講習の質向上など教員免許更新制の必要な見直しを推進する」ことが提案されている。

つまり, 教師の力量形成には, 大学と教育委員会や学校との一層の連携を図りつつ, 現職教師を対象とした研修や講座の開設を教育事務所や教育センター等との共同によって実施, 検討することが重要になると考えられる。

ところで, 木原(2006)は, 養成・採用・研修の改善を図るための具体策を検討するために「教師として仕事を行うために教師がどのような援助を必要としているのかという実態を把握することが不可欠である」と指摘している。このことは, より良い現職研修を実施するために, 学校現場の教師が現職研修に対してどのような認識や要望, 課題をもっているのかを把握する必要があることを示していると考えられる。そこで, 現職教員の体育授業に関する課題を明らかにした研究に着目してみる。

例えば, 加登本ら(2010)は小学校教師の体育指導に関する悩みを調査し, 子どもの学びの把握や子どもへの対応, 運動についての知識など体育授業における「内容的条件」(高橋, 1992)に関する課題が高い傾向にあることを明らかにしている。また, 加登本ら(2011)は, 加登本ら(2010)の報告を基盤として体育授業に関する悩み事の解決方法について調査し, 悩みの解決に同僚教師が重要な役割を担っていることを明らかにしている。さらに, 岩田ら(2012)は加登本ら(2010)を参考に中学校及び高等学校の保健体育教師を対象として体育授業を行う上での悩みについての調査を実施し, 体育授業の悩み事の認知が低い傾向にあると報告している。

これらの先行研究は, 体育授業の力量を向上させるための課題やその解決方法の現状を把握し, 体育授業の充実, 改善に向けた有益な資料を提供していると考えられる。しかしながら, 加登本ら(2010, 2011)の研究では, 必ずしも体育を専門としていない小学校教師を対象としているため, 悩みの度合いや内容に差がでることは十分に考えられる。また, 中学校や高等学校の保健体育教師を対象とした岩田ら(2012)では, 体育授業についての悩みの比率を算出し検討しているが, 授業の力量が「若手」「中堅」「ベテラン」と発達していくこと(木原, 2004)や小学校教師とは違い体育の専門性が高いことを踏まえると, 十分な分析がなされているとは言い難い。

そこで本研究では, 中学校保健体育教師の体育授業についての悩みの度合いを明らかにし,

さらに教職歴によって悩みの度合いに差異があるのかを明らかにすることを目的とする。

2 研究方法

2.1 調査対象及び質問紙の回収方法

調査対象は、〇県中学校保健体育教師 147 名である。調査対象者には、研究の目的以外にデータを使用しないこと、個人が特定されるようなことはないことなどを資料あるいは口頭で説明し、賛同が得られた人のみ回答してもらった。また、質問紙は、事前に調査依頼を行い、賛同の得られた学校や研究会等へ郵送し、後日回収した。なお、調査は、2012 年 9 月～2013 年 9 月にかけて実施した。対象者の属性は表 1 の通りである。

表 1 調査対象者の属性

教師区分	全体		男性		女性	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
若手教師	49	33.4	30	20.4	19	13.0
中堅教師	70	47.6	57	38.8	13	8.8
ベテラン教師	28	19.0	15	10.2	13	8.8
合計	147	100	102	69.4	45	30.6

2.2 調査内容及び分析方法

調査内容は、加登本ら（2010）及び岩田ら（2012）の作成した「体育授業の悩み事に関する内容」の 20 項目から 3 項目を除外した 17 項目とし、「教師として教える課題」や「子どもを把握する課題」などから構成されている。また、調査者と大学教員の 2 名で新たに設定した 28 項目の計 45 項目となっている（表 2）。新たに設定した項目が除外した項目より、体育授業における各運動領域に特化し、学習指導要領に示された各観点の学習指導に対する課題についての内容となっている。なお、加登本ら（2010）及び岩田ら（2012）の質問紙から除外した項目は、「それぞれの運動領域に必要な運動技術を指導できる」、「生徒がわかってできる体育の指導ができる」、「その他」となっており、新たに設定した項目が除外した項目より、詳細に回答が得られると判断し削除した。

回答は「1. まったく困っていない」から「5. とても困っている」までの 5 件法を用いた。

分析については、対象者全体の傾向を把握するために、それぞれの質問への回答を得点化し、その得点の評定比率と平均値を算出した。また、木原（2004）は授業の力量を「授業に関する信念」「授業についての知識」「授業技術」に区分し、「若手教師」（5 年未満）「中堅教師」（5 年以上 15 年未満）「ベテラン教師」（15 年以上）と段階を追って発達するとしている。そこで、教職歴によって体育授業についての悩み事に差異があるのかを検討するために、木原（2004）の区分に依拠し一元配置分散分析を行った。なお、すべての統計処理は SPSSver.22.0 を用いて行った。

表2 体育授業の悩み事に関する質問項目

1	自分が模範を示せない種目の運動を教えることができる	24	武道での「思考・判断」についての学習指導ができる
2	体づくり運動領域での「態度」についての学習指導ができる	25	ダンスでの「技能」についての学習指導ができる
3	体づくり運動領域での「知識」についての学習指導ができる	26	ダンスでの「態度」についての学習指導ができる
4	体づくり運動領域での「思考・判断」についての学習指導ができる	27	ダンスでの「知識」についての学習指導ができる
5	器械運動領域での「技能」についての学習指導ができる	28	ダンスでの「思考・判断」についての学習指導ができる
6	器械運動での「態度」についての学習指導ができる	29	体育理論における学習指導ができる
7	器械運動での「知識」についての学習指導ができる	30	生徒を安全に運動させる
8	器械運動での「思考・判断」についての学習指導ができる	31	授業中に一人ひとりの生徒の学びを把握できる
9	陸上競技での「技能」についての学習指導ができる	32	運動の苦手な生徒への配慮ができる
10	陸上競技での「態度」についての学習指導ができる	33	安全で効果的な場づくりをすることができる
11	陸上競技での「知識」についての学習指導ができる	34	運動技能を向上させるための指導ができる
12	陸上競技での「思考・判断」についての学習指導ができる	35	適切な学習規律が維持できる
13	水泳での「技能」についての学習指導ができる	36	生徒の学習活動を公正に評定できる
14	水泳での「態度」についての学習指導ができる	37	生徒たちの運動のつまずきを診断できる
15	水泳での「知識」についての学習指導ができる	38	体育用具の準備や体育施設の管理ができる
16	水泳での「思考・判断」についての学習指導ができる	39	配慮を要する生徒のニーズに応えることができる
17	球技での「技能」についての学習指導ができる	40	体育授業の年間指導計画が適切に作成できる
18	球技での「態度」についての学習指導ができる	41	生徒の意欲が喚起できる
19	球技での「知識」についての学習指導ができる	42	生徒の実態に合わせた教材づくりができる
20	球技での「思考・判断」についての学習指導ができる	43	生徒が私の授業を好意的に評価してくれる
21	武道での「技能」についての学習指導ができる	44	生徒同士の協力的な関係がつけられる
22	武道での「態度」についての学習指導ができる	45	教える運動についての知識がある
23	武道での「知識」についての学習指導ができる		

3 結果及び考察

3.1 対象者全体の評定比率

図1は、体育授業の悩みに関する質問項目ごとの評定比率を示したものである。ここでは、「とても困っている」「困っている」を合わせた人数の割合から悩み事について検討する。その結果、

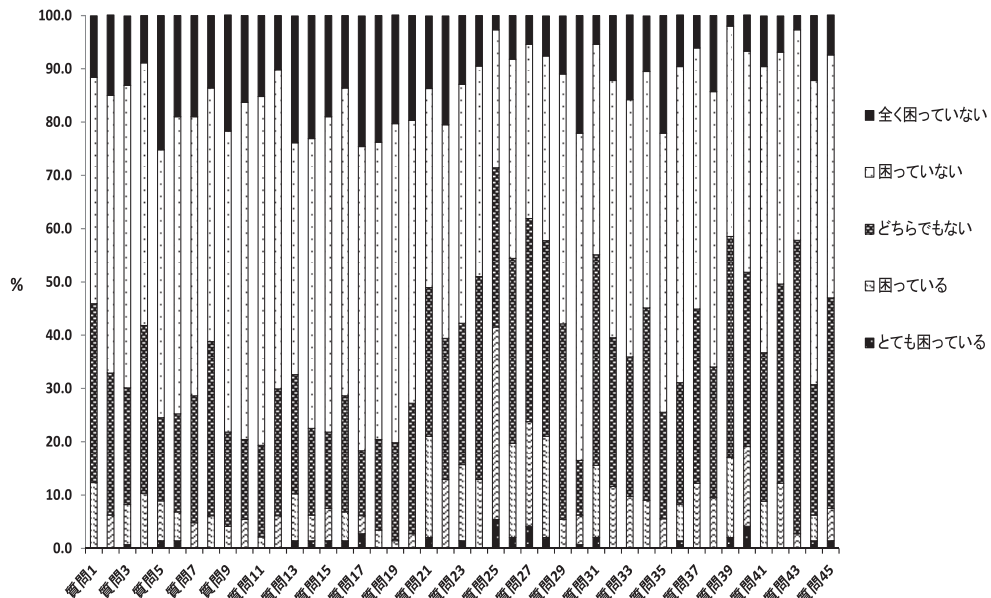


図1 対象者全体の質問項目ごとの評定比率

平均は 10.2% となっており、「ダンスでの『技能』についての学習指導ができる（質問 25）」が 41.5% と最も高い割合を示した。また、「ダンスでの『知識』についての学習指導ができる（質問 27）」や「ダンスでの『思考・判断』についての学習指導ができる（質問 28）」は、それぞれ 23.8% と 21.0% となっており、他の質問項目と比較すると高い傾向にあった。

ダンス授業は、平成 20 年の学習指導要領改訂において中学校 1, 2 年生での必修化が示されている。そのため、授業時数の増加によって男性教員の担当が増えており、教員の指導力養成が課題となっている。このことについて、中村（2012）は『「ダンスを指導できる教員が少ない』『男子の指導は難しい、自信がない』などの指導力不足を訴える教員が多く、その不安は授業計画に少なからず影響を及ぼしていた」と述べている。また、「男子が学ぶための鍵は男子教員にある」（松本、2012）ことも指摘されている。これらの指摘と踏まえると、本調査における保健体育教師は、ダンス授業の実践に関する学習内容の選択やそのための指導方法等に課題を抱えていることが示唆される。また「武道での『技能』についての学習指導ができる（質問 21）」が 21.0% となっており、3 番目に高い割合となった。浅見（2012）は、「武道の技能を高めることはできないからと、礼儀作法の学習に重点的に取り組ませ、社会学習の目標だけを満たせばよいというのでは不十分なのです」と指摘している。また、下野（2012）は柔道の実技講習会において「ケガのリスクを負ってまで、柔道の特性に触れさせる必要はないのではないか」という意見が多くを占めていたと述べている。特に、武道は小学校の体育授業において学習することが少ないため、中学校において初めて経験する生徒が多くいることが予想される。つまり、保健体育教師は、生徒たちが初めて取り組む武道についての技能指導やそれに伴う安全面の確保についての悩みを抱えていると考えられる。

以上より本調査の結果を踏まえると、平成 20 年の学習指導要領改訂によって男女必修化が行われた「ダンス」や「武道」の領域については、他の項目に比べると悩みが高い傾向にある。両領域が必修となって 6 年が経過していることを考えると、ダンスや武道の学習指導につながる研修や研究会などをさらに充実していく必要があると考えられる。

3.2 教職歴の違いによる悩みの差異

図 2 は、教職歴ごとの各質問に対する平均を示したものである。まず、若手教師で最も平均値が高かったのは、「体育授業の年間指導計画が適切に作成できる（質問 40）」の 3.37 であった。

次いで、「ダンスでの『技能』についての学習指導ができる（質問 25）」の 3.27、「ダンスでの『知識』についての学習指導ができる（質問 27）」の 3.10 の順となっている。

次に、中堅教師では、「ダンスでの『技能』についての学習指導ができる（質問 25）」が 3.27 と最も高い値であった。次いで、「ダンスでの『知識』についての学習指導ができる（質問 27）」の 2.73、「配慮を要する生徒のニーズに応えることができる（質問 39）」の 2.67 となっている。

次に、ベテラン教師は全体の質問を通して値が低い傾向にあった。その中で高い値を示したのが、「武道での『技能』についての学習指導ができる（質問 21）」、「武道での『思考・判断』についての学習指導ができる（質問 24）」、「ダンスでの『技能』についての学習指導できる（質問 25）」、「ダンスでの『知識』についての学習指導できる（質問 27）」の 2.68 であった。

以上を踏まえると、教職歴で検討しても先述したようにダンスや武道の領域に関する学習指導についての悩みが高い傾向にあることが示された。

次に、質問ごとに教職歴によって差があるのかについて分析を行った。その結果、45 個の質

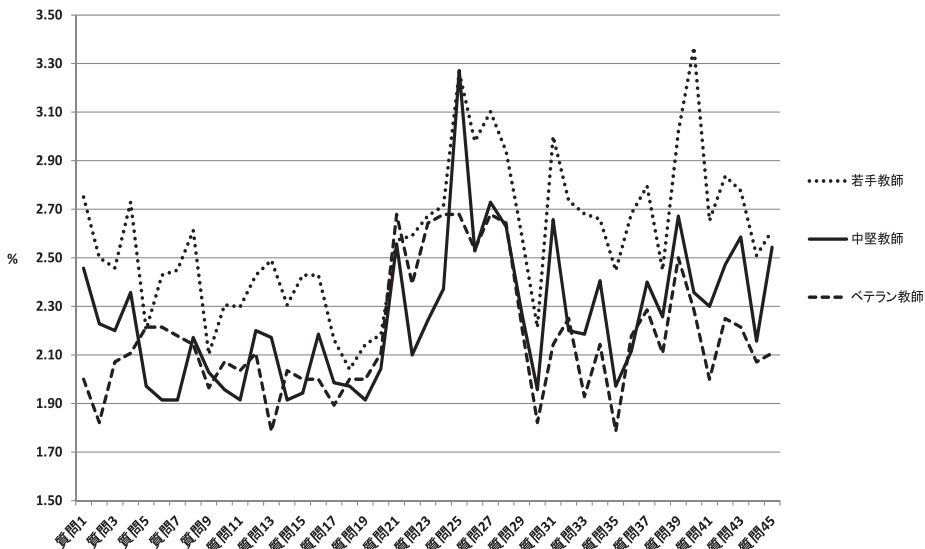


図2 教職歴の違いによる質問ごとの平均値

問中 29 個の質問において、有意差が認められた。そして、有意差の認められた項目については、Tukey の多重比較を行った (表 3)。

表 3 によると、有意差の認められたすべての項目では、若手教師が中堅教師やベテラン教師に比べて悩みの度合いが高かった。また、中堅教師とベテラン教師との間にも有意差が見られる項目もあった。

そこで、それらの結果を詳細に分析してみると、若手教師は、球技以外の各運動領域において「技能」や「態度」、「知識」などの学習指導に関して、中堅教師やベテラン教師よりも悩みが高い傾向にある。特に、「態度」の学習指導については、球技以外の領域で高い傾向にある。『意欲・関心』や『態度』は、到達点を示すことが困難 (木原, 2014) であることを踏まえると、若手教師は、到達点の示しにくい「態度」の目標に対して、どのように学習の課題を設定し、指導を行うのかについて課題を抱えていると考えられる。

また、若手教師は、授業の計画や技術指導、情意面の指導などの「教師として教える課題」(加登本ら, 2010) や子どもを把握して個別指導したり、学習規律を維持したりするなどの「子どもを把握する課題」(加登本ら, 2010) が中堅教師やベテラン教師に比べて高い傾向にある (質問 31 ~ 45)。松田 (2010) は、授業以外の生徒指導場面において保健体育教師の役割が期待されていることを述べつつも、「本来の授業における学習指導に力点を置かなければならない、現場でのジレンマの存在が予想される」と指摘している。また、木原ら (2013) は、「中・高等学校の保健体育教師には生徒指導や部活動指導といった役割が求められており、授業にかかわる研修会の必要感が低いのではないか」とも指摘している。つまり、若手教師は、授業の実践に関する悩みを抱えているものの、それ以外の役割を求められるため授業の充実や改善に向けて十分に取り組めていないことが予想される。

吉崎 (1998) は中堅教師を『一人前』の教師としており、「一人立ちして、授業設計・実施・評価や学級経営をする力量を備えた教師」としている。また、「教職 5 年目ともなれば授業力量

表 3 教職歴の違いによる一元配置分散分析の結果

	項目	F値	有意差	多重比較
1	自分が模範を示せない種目の運動を教えることができる	7.388	$p < .01$	若・中 > ベ
2	体づくり運動領域での「態度」についての学習指導ができる	7.252	$p < .01$	若・中 > ベ
3	体づくり運動領域での「知識」についての学習指導ができる	2.465	n.s.	
4	体づくり運動領域での「思考・判断」についての学習指導ができる	6.439	$p < .01$	若 > 中・ベ
5	器械運動領域での「技能」についての学習指導ができる	1.245	n.s.	
6	器械運動での「態度」についての学習指導ができる	5.962	$p < .01$	若 > 中
7	器械運動での「知識」についての学習指導ができる	7.483	$p < .01$	若 > 中
8	器械運動での「思考・判断」についての学習指導ができる	5.726	$p < .01$	若 > 中・ベ
9	陸上競技での「技能」についての学習指導ができる	.317	n.s.	
10	陸上競技での「態度」についての学習指導ができる	3.475	$p < .05$	若 > 中
11	陸上競技での「知識」についての学習指導ができる	5.444	$p < .01$	若 > 中
12	陸上競技での「思考・判断」についての学習指導ができる	2.240	n.s.	
13	水泳での「技能」についての学習指導ができる	5.258	$p < .01$	若 > ベ
14	水泳での「態度」についての学習指導ができる	3.249	$p < .05$	若 > 中
15	水泳での「知識」についての学習指導ができる	5.576	$p < .01$	若 > 中
16	水泳での「思考・判断」についての学習指導ができる	2.822	n.s.	
17	球技での「技能」についての学習指導ができる	1.019	n.s.	
18	球技での「態度」についての学習指導ができる	.125	n.s.	
19	球技での「知識」についての学習指導ができる	1.710	n.s.	
20	球技での「思考・判断」についての学習指導ができる	.522	n.s.	
21	武道での「技能」についての学習指導ができる	.149	$p < .01$	若 > 中
22	武道での「態度」についての学習指導ができる	4.196	$p < .05$	若 > 中
23	武道での「知識」についての学習指導ができる	3.815	n.s.	
24	武道での「思考・判断」についての学習指導ができる	2.935	n.s.	
25	ダンスでの「技能」についての学習指導ができる	4.461	$p < .05$	若・中 > ベ
26	ダンスでの「態度」についての学習指導ができる	3.972	$p < .05$	若 > 中
27	ダンスでの「知識」についての学習指導ができる	2.871	n.s.	
28	ダンスでの「思考・判断」についての学習指導ができる	1.815	n.s.	
29	体育理論における学習指導ができる	3.462	n.s.	
30	生徒を安全に運動させる	2.612	n.s.	
31	授業中に一人ひとりの生徒の学びを把握できる	10.141	$p < .001$	若・中 > ベ
32	運動の苦手な生徒への配慮ができる	6.673	$p < .01$	若 > 中・ベ
33	安全で効果的な場づくりをすることができる	8.883	$p < .001$	若 > 中・ベ
34	運動技能を向上させるための指導ができる	3.921	$p < .05$	若 > ベ
35	適切な学習規律が維持できる	8.250	$p < .001$	若 > 中・ベ
36	生徒の学習活動を公正に評定できる	8.398	$p < .001$	若 > 中・ベ
37	生徒たちの運動のつまづきを診断できる	5.337	$p < .01$	若 > 中・ベ
38	体育用具の準備や体育施設の管理ができる	1.650	n.s.	
39	配慮を要する生徒のニーズに応えることができる	4.639	$p < .05$	若 > 中・ベ
40	体育授業の年間指導計画が適切に作成できる	25.784	$p < .001$	若 > 中・ベ
41	生徒の意欲が喚起できる	7.298	$p < .01$	若 > 中・ベ
42	生徒の実態に合わせた教材づくりができる	5.886	$p < .01$	若 > 中・ベ
43	生徒が私の授業を好意的に評価してくれる	8.752	$p < .001$	若・中 > ベ
44	生徒同士の協力的な関係がつくれる	4.051	$p < .05$	若 > 中・ベ
45	教える運動についての知識がある	4.323	$p < .05$	若・中 > ベ

において教師の個人差がみられることも事実である」と述べている。すなわち、若手教師が中堅教師として、「一人前の教師」となるには、若手教師の段階で授業の設計や実践等に関して十分に取組み、その素地を培っている必要がある。そのためにも、若手教師が授業に関して力量を高めていけるような研修や取り組みが必要であると考えられる。

4 まとめ

本研究は、中学校保健体育教師の体育授業について悩みの度合いを明らかにし、さらに教職歴による差異を明らかにした。その結果、以下の3点が明らかになった。

第1に、保健体育教師の体育授業についての悩みは、低い傾向にある。しかし、ダンスや武道柔道の学習指導に関する質問項目については他と比較すると高い傾向にあった。

第2に、教職歴別にみると、若手、中堅、ベテラン関係なくダンスや武道の学習指導に関する悩みが高い傾向にあった。また、若手教師は「体育授業の年間指導計画が適切に作成できる」、中堅教師は「配慮を要する生徒のニーズに応えることができる」についての悩みが高い傾向にあった。

第3に、若手教師は、授業の実践に関する悩みを抱えてながらも、生徒指導や部活動指導などそれ以外の役割を求められており、授業の充実や改善に向けて十分に取組んでいない傾向にあった。

本研究では、筆者らが選定した項目から保健体育教師の悩みごとを分析し、その実態を把握した。しかし、木原（2011）は「中・高等学校の保健体育教師のリアルな成長過程を明らかにしなければ、その成長を支援する方策を立案することが困難であろう」と指摘している。今後は、量的な研究によって一般的傾向を把握しつつも、保健体育教師のリアルな実態に即した質的研究によって、個人の力量形成の過程を把握するための調査を行う必要がある。

<注>

1) 「力量」とは、山崎（2002, p74）の「単に知識・技術のレベルに限定するのではなく、しかしあまり人格性全般のレベルまで拡大することせず、『教職活動を支える知識と価値観を含めた場合』の用語」に依拠し、教科指導を採用当初から著しい支障が生じることなく実践できるため知識と技能と価値観を含んだものとする。

<付記>

本研究は、JSPS 科研費（基盤 B：課題番号 24300212、若手 B：課題番号 24700635）の補助による成果の一部である。

<引用参考文献>

浅見裕（2012）武道を初めて学ぶ生徒が楽しく取り組める学習指導。体育科教育 60（1）：14-17
 中央教育審議会（2006）今後の教員養成・免許制度の在り方について。中央教育審議会答申 2006 年 7 月
 中央教育審議会（2012）教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について。中央教育審議会答申 2012 年 8 月
 岩田昌太郎・加登本仁・松田泰定・木原成一郎・徳永隆治・林俊雄・久保研二・村井潤・嘉数健悟・

- 林楠・藤本翔子（2012）保健体育教師の悩み事に関する調査研究．学校教育実践学研究 18：151-158
- 加登本仁・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎・徳永隆治・林俊雄・村井潤・嘉数健悟（2010）体育授業の悩み事に関する調査研究（その 1）－教職経験に伴う悩み事の差異を中心として－．学校教育実践学研究 16：85-93
- 加登本仁・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎・徳永隆治・林俊雄・村井潤・嘉数健悟（2011）体育授業の悩み事に関する調査研究（その 2）－悩み事の解決方法を中心として－．学校教育実践学研究 17：169-174
- 梶田叡一（2004）第 11 章指導要録・通知表から授業の改革へ．梶田叡一編 絶対評価＜目標標準 抛評価＞とは何か．小学館：東京，pp.112-127
- 木原成一郎（2014）第 1 章体育科の目標と評価 第 2 節体育科の目標と評価の展開．木原成一郎編 体育授業の目標と評価．広島大学出版会：広島，pp.32-33
- 木原成一郎（2011）専門職としての教師の成長過程と支援体制．日本体育科教育学会編 体育科教育学の現在．創文企画：東京，pp.193-207
- 木原俊行（2004）授業研究と教師の成長．日本文教出版：大阪，p27
- 教育職員養成審議会（1997）新たな時代に向けた教員養成の改善方策について．教育職員養成審議会第 1 次答申 1997 年 7 月
- 松田恵示（2010）調査研究からみえてきた教師の職能成長．梅野圭史・海野勇三・木原成一郎 他編 教師として育つ－体育授業の実践的力量を育むために－．明和出版：東京，pp.122-127
- 松本富子（2012）学校におけるダンス教育の変遷を辿る－日本の文化的特質の中に萌芽し発展したダンスの教育－．体育科教育 60（2）：10-13
- 中村恭子（2012）移行期のアンケート調査から見えてきたダンス教育の展望と課題．体育科教育 60（2）：18-21
- 下野六太（2012）一本を取る柔道の面白さを味わわせる．体育科教育 60（2）：28-31
- 山崎準二（2002）教師のライフコース研究．創風社：東京
- 吉崎静夫（1998）11 章一人立ちへの道筋．浅田匡・生田孝至・藤岡完治編 成長する教師．金子書房：東京，pp.162-173

＜分担箇所＞

本研究は科研費の補助による研究のため，研究のデザインや分析の視点，データの解釈等を共著者で行った。執筆に関しては以下の通りである。

1. 研究背景と目的（嘉数・岩田）
2. 研究方法（嘉数・共著者）
3. 結果と考察（嘉数・共著者）
4. まとめ（嘉数）

A Study on the Professional Development of Teaching in Health and Physical Education Teachers: With a Focus on the Difference in Teaching Experience

Kengo KAKAZU
Shotaro IWATA
Seiichiro KIHARA
Ryuji TOKUNAGA
Toshio HAYASHI
Kazuki OOSDO
Kenji KUBO
Jun MURAI
Hitoshi KADOMOTO

Key Words: Health and Physical Education Teacher, Teaching Experience, Professional Development, Difficulties

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the degree of teaching difficulties in the junior high school health and physical education teachers, specifically in the physical education course. The results of the study suggest the following three conclusions:

1. Low mean scores on the evaluative questions indicate the difficulties related to the teacher's lack of training in the physical education class. However, the scores regarding the teaching of dance and judo tended to be higher than questions on other course topics.
2. The difficulties in teaching dance and judo tended to be higher, regardless of whether the teacher was a novice teacher, a nucleus teacher, or a veteran teacher.
3. The study indicates that the novice teacher was having difficulties in the practice of teaching. More professional development in the areas of student guidance and extracurricular activities is required, as the novice teacher's lack of training in these areas prohibits his/her ability to properly enhance and improve the physical education course.